日時		経緯	山口敬之氏関連の動き
2015年	4月3日	詩織さんが山口敬之氏と面会。 午後8時過ぎに串焼き屋に入店。 午後9時40分頃寿司屋に入店。	
	4月4日	午前5時頃に痛みで目が覚め、ホテルでレイプされていることに気付く。 記憶は寿司屋の途中から欠落	
	4月9日	警視庁原宿署に相談	
	4月11日	原宿署で高輪署の捜査員と面会	
	4月15日	捜査員とホテルで防犯カメラの映像を一緒に見る	
	4月23日		TBSワシントン支局長を解任
	4月30日	高輪署で告訴状受理	
	6月初頭	証拠がそろい、準強姦容疑での逮捕状が発行される	
	6月4日	「山口氏が成田に帰国するタイミングで逮捕する」との連絡。 詩織さんにドイツから日本に戻るよう要請される	
	6月8日	捜査員から「上からの指示で逮捕できなかった」との連絡。 捜査員は担当から外れる	
	8月26日	山口氏が書類送検される	
	10月	詩織さんが担当検事と初めて面会	
2016年	1月1日		担当検事と初めて面会
	5月30日		TBS退社
	6月	詩織さんが担当検事と2度目の面会	
	6月9日		『総理』(幻冬舎)発売
	7月22日	山口氏が不起訴処分に	
2017年	1月27日		『暗闘』(幻冬舎)発売
	5月	週刊新潮が報道。 「トップの意を受け、あるいは忖度して操作を中止したのか？」との問いに **中村格(いたる)警視庁刑事部長(当時)** 「(山口氏の立場に)関係なく、事件の中身として、(逮捕は必要ないと)**私が決済した。** (捜査の中止については)指揮として当然だと思います。自分として判断した覚えがあります」	週刊新潮が山口氏に取材依頼書を送信した後、 山口氏から誤送信のメールが届く 「**北村さま**、週刊新潮より質問状が来ました。 伊藤の件です。取り急ぎ転送します。山口敬之」 ※宛先は**北村滋・内閣情報官**か？(山口氏は否定)
	5月29日	**検察審査会**に不服申し立て。詩織さんが会見	詩織さんの会見を受けてFacebook上で反論
	9月21日	東京第六検察審査会が「**不起訴相当**」の判断を下す	
	10月20日	伊藤詩織さんが著書「ブラックボックス」(文藝春秋)発売	
	10月26日		「月刊Hanada12月号」に 「私を訴えた伊藤詩織さんへ」と題した独占手記を寄稿して反論

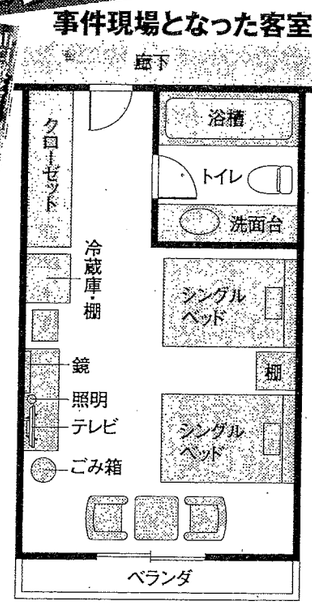
週刊新潮

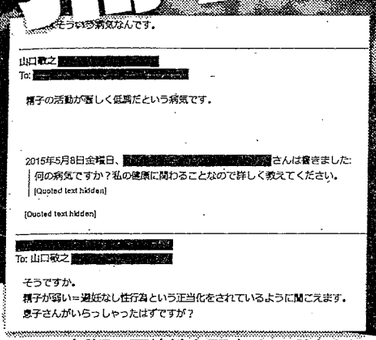
特集

「警視庁刑事部長」が握り潰した「安倍総理」ベッタリ記者の「準強姦逮捕状」

被害女性が告発！

首相、官房長官が最も信頼するジャーナリスト!!





妊娠の可能性を否定する理由とは

ジャーナリストと彼らが唱える「知る権利」というものはお神酒徳利であり、卓上に並ぶ塩と胡椒瓶のように分ちがたい間柄にある。

ならば、ジャーナリスト当人のことを知る権利の方も担保されるべきなのだが、山口敬之と聞いてピンとこない方も少なくなかろう。もっとも、主にワイドショーに出演し、立て板に水のように北朝鮮情勢やトランプ大統領の動静を解説するキューピー頭の男と形容すれば膝を打つに違いない。

なにしろ4月だけで4局8番組、延べ47回もの露出をしているのだから。

彼は1990年にTBSに入社。報道カメラマン、臨時プノンペン支局、社会部などを経て2000年から政治部に所属し、13年からワシントン支局長を務めていた。後述する出来事がきっかけで16年5月に退社するも、直後に『総理』（幻冬舎）を上梓、その中にこのような記述がある。

「（安倍（晋三）が再び）総裁の座を射止めた直後、私と遭遇した菅（義偉）は、満面の笑みで握手を求めてきた。「あの夜の山口君の電話がなければ、今日という日はなかった。ありがとう」」

また今年2月10日の安倍・トランプ会談におけるエピソードについて、

〈安倍さんはネクタイの色を『金』にするかで迷っていたんですが、〝この際、金で行こう〟。さっき、電話かかってきました。会見場に入って来たときに2人とも厳しそうな顔をしていたのはなぜかと彼に聞くと、〝トランプから、あんまり愉快にすると良くないから、厳しい顔して出て行こう、と言われたんだ〟ということでした〉（2月11日放映、ABC『教えて！ニュースライブ　正義のミカタ』より）

こんな風に披露し、共演芸人らがその食い込み方に感心していたものだった。

要するに、彼は安倍政権の枢要どころかど真ん中と極めて近く、彼らが話す内容を綴ることができる人物なのだ。知っていても書けず、国民の知る権利の負託に応えられぬ記者らの体たらくが生み出したこの異色ジャーナリストは、キー局勤務の妻や玉のような子に恵まれ、春の花見時を謳歌している。スポットライトが彼を確実に捉える一方で、そこから伸び出す影法師について触れるのが本稿のテーマである。それを打ち明けるのが、山口氏にレイプされたと訴える27歳の女性。海外でジャーナリスト活動を展開する彼女の告白にまずは耳を傾けよう。

「ニューヨークの大学でジャーナリズムと写真を専攻していた私と山口が出会ったのは2013年秋頃のことです。報道の仕事がしたいと告げると、〝TBSのNY支局長にぜひ会わせたい〟と。実際、数日後にその3人でランチをし、支局内を案内するなどしてもらいました」

その後、彼女は15年の頭に帰国してトムソン・ロイターでインターンとして働きつつ就職活動をする中で山口氏の「ワシントンに来てくれたらインターンでも何でも採りたいな」の言葉が頭を過る。そこで彼にメールをしたのがこの年の3月で、

〈しばらくこっちで仕事をしてもらいながら正式な採用に向かうという手も。それなら私が決裁できます〉

〈最大の関門はビザ。TBSで支援する事も可能〉

目下、安倍首相に最も近いジャーナリストとは山口敬之・元TBSワシントン支局長(51)を措いて他にない。彼には準強姦の嫌疑をかけられ逮捕寸前だった過去がある。これを握り潰したのもまた官邸重用の警視庁刑事部長。「忖度」大合唱の中、被害女性が告発する。

本当に好きになって

「今回も誰か同席者がいると思っていたところ、お店に行って初めて2人きりなんだとわかりました。会ったのはそのときが3回目になります。その店は串焼き屋で、彼が19歳のときから父親と来ていると言っていました。口にしたものは串焼き5本、瓶ビール2本のシェア、グラスのワインを1杯ほど、になります」

そこでは「鳩山さん（由紀夫元首相）や安倍さん」などのやりとりを経て、

〈ヤボ用で一時帰国する事になった。空いてる夜ある？　なんか奢ります〉

〈あと、今売ってる週刊文春に僕の寄稿が掲載されるから読んでおいてね〉

として、彼女は最終的に就職の話を詰めるため、彼と東京・恵比寿で会う約束をした。それが4月3日のことである。

ちなみに文春への寄稿とは、彼が支局長の任を解かれ、退社する原因となったものである。自身渾身の取材を放送できず、代わってそれを持ち込んで原稿にした経緯を問題視されたのだった。彼女の話に戻ろう。

の名前を出すなど人脈を吹聴するばかりで肝心の仕事の話は出なかった。店を後にする際に彼が、

「僕は明日帰るんだけど、恵比寿には顔を出さなきゃいけない店がものすごくあるから付き合って」

と言い2人は鮨屋へ。

「その場で〝良い評判を聞いていたので一緒に働きたいと思っていた〟とやっと仕事の話が出来ました。入店まで頭はクリアだったのに、2度目にトイレに行った時にクラクラし、給水タンクに頭をもたせかけて休んだきり、記憶がないんです。覚えている限りでは、お刺身と日本酒2合をシェアして飲んだこと。それから偶然『さかなクン』が店にいて、声を掛けるか否かという話をしたことくらいなのです」

彼女は左党だと主張し、

「酔って記憶をなくした経験は一度もありません。普段は2人でワインボトル3本空けてもまったく平気でいられる私が仕事の席で記憶をなくすほど飲むというのは絶対ない。だから、私は薬（デートレイプドラッグ）を入れられたんだと思っています。身体に痛みを感じて目覚めた時、あの人が身体の上に乗っている状態でした」

午後11時頃に退店し、タクシーに乗車した2人。

記憶のない彼女に代わって、当時両名を乗せたタクシー運転手が証言する。

「その女性のことなら、よく憶えています。後部座席の奥側に彼女が座らされていたのですが、男性は彼女

に〝もっといい仕事を紹介する〟と話していました。女性は何度か〝駅の近くで降ろしてください〟と訴えたのですが、男性が〝何もしないから。ホテルに行って〟と。それで、結局2人をホテルに連れて行ったのですが、到着しても彼女はなかなか降りようとしませんでした。けれど最終的には彼女は体ごと抱えられて、座席から降ろされたのです」

それが午後11時22分。フロントからエレベーターで2階へ、彼女は意識が朦朧としたままだ。

「意識が戻ったのは早朝5時頃で、痛みを感じてのこと。仰向けの私に相手が跨っている状態で、抵抗してトイレに逃げ込みました。その際に避妊具をしていない陰茎が見えました。なんで自分がここに、裸でいるのか全く分からなくて。でも頭はすごくクリアで二日酔いという感覚は皆無ですぐに動けた。ベッドの上に彼のノートパソコンが開かれたままだったのも覚えているし、直感的に撮られているんだと思ったのも事実です。後でわかったのは乳首から血が滲んでいたことで、膣内もそうだったかもしれませんが。トイレから出たらすぐ逃げようとしたんですが、そのまますごい勢いでベッドに顔と身体を押さえつけられました。とにかく力が強かったです。何とか抵抗して2度目のレイプをされることはありませんでしたが、怒りが収まらず感情のままに英語でこう言ったのです」

女性 一緒に仕事をしようという話だったのに、どういうつもりで、どういう神経でこんなことをするのか。しかもコンドームも付けないで、妊娠だって病気だってあるだろうし、何を考えているのか。

「成田空港で逮捕！」

仕事の能力ではなく、単に女性として見られていたことの悔しさ。山口氏が「権力者とのコネクション」を折に触れて吹聴していたため、捜査当局に真実を打ち明けたところで揉み消されるのではないかという迷い。ジャーナリストとして、仕事ができなくなるかもしれない恐れ。それらがないまぜになって、周囲に事実を打ち明けるのに2～3日、警察へ出かけて行くまでに5日を要した。

「まずは家の近くの原宿署に行って話しましたが、ホテルの所在地は高輪署の管轄になるからということで、そこの警部補の方と面会したのが11日。〝こういうことはよくある話なので難しい〟と頭ごなしに言われました。でもホテルのエントランスとロビーについた監視カメラの画像を確認してもらうなどしたところ、その警部補の方も徐々に捜査に積極的になっていきました」

そこから、特定したタクシー運転手やホテルのベルボーイによる証言などを積み上げた。加えて、「パソコンで撮られているかも……」と彼女が恐れた行為中の映像についても、

「撮られているかも、じゃ何も出来ないわけですが、本当に撮られているなら証拠になるし、その隠滅の恐れも、そして逃亡の可能性もあるからと『準強姦』の逮捕状が発付されました。日付はわからないのですが、私が連絡をもらったのは6月4日になります」

「人の心神喪失若しくは抗拒不能に乗じ」たが故にこの罪状が適用。山口氏は主として外国にいるので逮捕状の期間は比較的長く設定された。

「4日当日は仕事でベルリンにおり、向こうのお昼頃だったと思いますけれど、〝逮捕したらあなたに話を聞かなくてはならないので、すぐに帰国できませんか〟と担当の警部補に言われたのです」

事件の経緯

※文中、一部敬称略

2013年秋頃	被害女性が山口とNYで知り合う。 後日、TBSのNY支局長、山口、彼女の3人でランチ
2015年3月25日	被害女性が山口に仕事を探している旨のメールを送付
3月26日	山口が寄稿した『週刊文春』が発売
4月 3日	一時帰国中の山口と恵比寿で初めて2人きりの食事。 2軒目で記憶を失った彼女は港区内のホテルに連れ込まれる
4月 9日	被害女性が原宿署へ被害の相談に向かう
4月15日	高輪署の警部補とホテルの監視カメラ映像を確認
4月18日	山口が彼女にメールで 「泥酔していたから介抱しようとした。合意の上」と主張
4月23日	ワシントン支局長を解任
4月30日	被害女性が高輪署に被害届を提出
6月 8日	成田空港で逮捕直前、逮捕状執行が取り消しに
2016年5月30日	山口がTBSを退社
6月 9日	『総理』(幻冬舎)発売
2017年1月27日	『暗闘』(幻冬舎)発売

逮捕予定は6月8日。山口氏が米国から帰国直後の成田空港においてだった。ちなみにこの時点で彼は文春の件で営業局に異動させられ、事実上、ジャーナリスト活動を封じられている。

そして迎えたこの日、担当の警部補とその上司を含めた複数の警察官は、成田空港で被疑者となる人物を逮捕すべく待ち構えていた。

ところが、そこへ上層部から連絡が入る。

〈山口逮捕は取りやめ！〉

入国審査を経た山口氏が通り過ぎて行く。本来なら即刻現場を退避すべきところ、やり場のない悔しさを抱えて署に戻れるほど図太くはない。ヒラメみたいに生きたかったわけでも、死体ぐらい出なきゃ警察は動かないってことでもないが。

「私が判断した」

この事件をよく知る警視庁担当記者によると、

「逮捕状を取るまでの間、高輪署による捜査状況は、警視庁（刑事部）捜査一課にも報告されている。準強姦の案件なのだから任意ではなく強制性のある逮捕でなければ意味がないという認識だった。ところが、『山口逮捕』の情報を耳にした本部の広報課長が〝TBSの記者を逮捕するのはオオゴトだ〟という風に捉えたことで、刑事部長、警視総監に話が届いたわけです。なかでも、菅さんの秘書官として絶大な信頼を得てきた中村さん（格・刑事部長＝当時＝）が隠蔽を指示した可能性が取り沙汰されてきました」

中村氏とは、

「昭和61年警察庁入庁組のエース。民主党政権時代に官房長官秘書官を務めていて、自民党が政権を奪取したあとは任を解かれる見込みでしたが、〝やらせてください〟と菅さんに土下座せんばかりだった。留任させたところ、得意の危機管理能力を発揮し、将来の（警察庁）長官間違いないとまで菅さんが評価しているのです」

いわば官邸の門番たる中村氏ご当人に、トップの意を受け、あるいは忖度して捜査を中止したのか問うと、

「ありえない。（山口氏の立場に）関係なく、事件の中身として、（逮捕は必要ないと）私が決裁した。（捜査の中止については）指揮として当然だと思います。自分として判断した覚えがあります。事件が最後にどう評価を受けているかを見てもらえれば……」

確かに15年8月に書類送検され、その後に嫌疑不十分で不起訴となってはいるが、およそ検察が捜査を尽くしたとは言い難い。鹿児島県警本部長や首相秘書官を歴任した小野次郎前参院議員は、

「準強姦事件の逮捕は管轄の署長の判断で行なわれるものだから、刑事部長がそこに口を挟むというのは異例だと言わざるをえませんね」

と首を傾げるばかりだし、彼女自身、検察審査会に不服の申し立てをするつもりだという。

さて、本誌の取材に対し、山口氏はこう回答した。

「私は当該女性に飲酒を強いておりません。『デートレイプドラッグ』なるものは見た事も触った事もありません。当該女性が千鳥足で、自力で公共交通機関を利用できるか不安だった一方、私は当日24時までに終わらせなければならない業務があったため、やむなく宿泊施設に来ていただきました」

あとは、法に触れることは一切しておらず、逮捕状は見せられていないし、任意調査に全面的に協力したし、安倍首相を始めとする官邸首脳にはこの件は相談していない……と訴えた。

結局、避妊具を使用せずに性行為したことには答えずじまいだったが、妊娠の可能性に言及する彼女に対し、22ﾋﾞｰのメールのように、〈精子の活動が著しく低調だという病気です〉と弁明していたのだ。

彼の主張を聞いた被害女性は改めて思いを語る。

「私が事実を公表しようと決断したのは、今回経験したことをそのまま世に出さなければ、私と同じように性犯罪の被害に遭った女性が、今後も泣き寝入りせざるをえない状況が続いてしまうと思ったからです。今国会で性犯罪の厳罰化を柱とする刑法改正案が提出されていますけれど、性犯罪の捜査に関しては最初から被害者に諦めを強いているのが今の社会の現実。その仕組みを少しでも変えていきたい。また、被害者をサポートする法案の整備も必要だと考えています」

その言葉の真率な響きは、半ばふんぞり返った権力を揺らすだろうか。

事件当時に警視庁刑事部長だった中村格氏

Shoko Egawa
@amneris84

フォローする

詩織さんの訴えに対して、検察審査会が不起訴相当の議決をしたと報じられていたので、どういう理由なのか見に行ったけど、議決書はペラ一枚で、理由らしい理由も書かれておらず……。審査補助員の弁護士も就かなかったみたいだ。

17:44 - 2017年9月23日

7,443件のリツイート **4,321**件のいいね

146 7,443 4,321

平成２９年東京第六検察審査会審査事件（申立）第１０号

申立書記載罪名　準強姦

検察官裁定罪名　準強姦

議決年月日　平成２９年９月２１日

議決の要旨

審査申立人　A

審査申立代理人弁護士　岡田　[illegible]，杉本博哉，村田智子，

[illegible]

被疑者　B

不起訴処分をした検察官

東京地方検察庁　検察官検事　[illegible]

上記被疑者に対する準強姦被疑事件（東京地検平成２７年検第２６０６７号）につき、平成２８年７月２２日上記検察官がした不起訴処分の当否に関し、当検察審査会は、上記審査申立人の申立てにより審査を行い、次のとおり議決する。

議決の趣旨

本件不起訴処分は妥当である。

議決の理由

本件不起訴記録及び審査申立人提出資料を精査し、慎重に審査したが、検察官がした不起訴処分の裁定を覆すに足りる事由がないので、上記趣旨のとおり議決する。

平成２９年９月２１日

東京第六検察審査会

特集

「準強姦逮捕状」の「安倍総理」ベッタリ記者に

アッキーが「いいね！」した"女の敵"

山口敬之 [redacted] Sat, Mar 28, 2015 at 5:31 PM
To: [redacted]

[redacted]さん、

履歴書受け取りました。ありがとう。

最大の関門はビザだね。ＴＢＳで支援する事も可能ですので、検討してみます。

ところで、ヤボ用で一時帰国する事になったんだけど、来週は東京にいますか？

ＴＢＳ山口敬之

山口敬之 [redacted] Sat, Apr 18, 2015 at 11:51 PM
To: [redacted]

あなたはあの夜私の部屋に入ると、部屋の二カ所に嘔吐した後、トイレに駆け込みました。私は私のスーツケースの中やパソコンに吐きかけられたゲロを袋に片付けて濡れタオルで拭いて、トイレにあなたを見に行くと、あなたは自分がトイレの床に吐いたゲロの上で寝込んでいました。私はあなたをゲロから剥がして、ゲロまみれのあなたのブラウスとスラックスを脱がせ、あなたを部屋に移してベッドに寝かしました。そしてトイレに戻って吐き散らかされたゲロをシャワーで洗い流して、激もゲロが多く付着していたブラウスを、明朝着るものがないと困るだろうと思って水ですすいでハンガーに干しました。そして部屋に戻るとあなたはすでにいびきをかいて寝ていました。私はあなたの髪の毛などについた嘔吐臭が耐えられなかったので別のベッドで寝ました。

その後あなたは唐突にトイレに立って、戻ってきて私の寝ていたベッドに入ってきました。その時はあなたは「飲み過ぎちゃった」などと普通に話をしていました。だから、駆逐不明のあなたに私が勝手に行為に及んだというのは全く事実と違います。私もそこそこ酔っていたところへ、あなたのような素敵な女性が半裸でベッドに入ってきて、そういうことになってしまった。お互いに反省するところはあると思うけれども、一方的に非難されるのは全く納得できません。

あなたが妊娠するという事はあり得ないと考えています。でも、あなたが不安なのはわかりましたから、こちらで出来る事は買んでします。しかし、問題に対処するには、一方的な被害者意識を改めてもらいたい。

[Quoted text hidden]
[Quoted text hidden]

[redacted] Sat, Apr 18, 2015 at 8:36 PM
To: 山口敬之

山口さん、

今回山口さんと帰国した際にお会いしたのは新規のプロデューサーとして採用、ないしフリーとして契約をしたいので残りの問題のVISAの話をしようとお話いただいたからですよね。
なのに意識の無い私をホテルに連れ込み、避妊もせず行為に及んだあげく、その後なにもなかったかのように電話でビザの手続きをするので連絡するといってきたり、この度に及んでそのようなあやふやなご返答をされるのは何故ですか？

[redacted] Wed, May 6, 2015 at 10:28 PM
To: 山口敬之

山口さん、
今までは必死に自分の中の記憶と感情を抑えてきました。
向き合うと崩壊してしまうからです。
ただもう自分自身をコントロールする事が難しくなってきました。

あの夜、山口さんに意識がないまま強制的に性行為を行われ、肉体的にも精神的にも傷つけられました。
あの後、腰は数日間痛み、乳首はかなり傷つきシャワーを当てられないほどでした。膝の関節もずれ今日までサポーターをつけています。そして告訴をしていた山口さんにこの様なことをされ、ショックで夜も眠れず仕事に出れなく

[redacted] Mon, May 11, 2015 at 1:40 PM
To: 山口敬之

あなたの謝罪、反省の意をまず最初に聞きたい。事実が乖離しているとはどういうことでしょうか？この点についてご返答がいただけない以上、この先は山口さんとお話する意味がないように思います。私達は事実を伝えるのが仕事ですよね？私は事実を曲げる人が一番嫌いです。

Sent from my iPhone
[Quoted text hidden]

被害女性と山口氏とのメールのやりとり

総理ベッタリの山口敬之・元TBSワシントン支局長(51)に、準強姦容疑で逮捕寸前だった過去のあることが明らかとなった。行状は女の敵そのもの。だが、アッキーこと安倍昭恵夫人は彼のFBに「いいね！」を押すなど、官邸側のフォローがありありと見て取れるのだ。

東京がまだ夜明け前の惰眠を貪っている時間帯。そこで目覚め、全裸の男にベッドで組み敷かれていたとしたら……誰だって悪夢など想像したくないものだ。

先週号でお伝えした〈「警視庁刑事部長」が握り潰した「安倍総理」ベッタリ記者の「準強姦逮捕状」〉は、そんなホラー映画みたいな事実を巡っている。ざっと内容を振り返っておくと、米国の大学でジャーナリズムと写真を専攻していた被害女性(28)が、就職斡旋の甘言を弄して近づいた山口氏の欲望に搦め捕られた準強姦に相当する事案である。

2015年4月3日。被害女性は左党ゆえに酔い潰れたことなどなかったが、薬物のようなものを盛られたのか、東京・恵比寿において飲食店を2軒はしごするなかで意識を失う。山口氏が投宿する「シェラトン都ホテル東京」に無理やり連れ込まれ、下腹部の痛みで未明に意識が戻った時には全裸の自分の上に山口氏が乗っかって腰を動かしており、やっとの思いで撥ね退けたら避妊具無しの陰茎が見えた。

それから、彼女が被害届を提出した警視庁高輪署の警部補が中心となって証拠を収集し、6月4日までには準強姦容疑で逮捕状が発付。8日、山口氏が米国から成田空港へ到着するまさにそのタイミングで逮捕する算段だったが、官邸が重用する警視庁刑事部長の独断で中止となった――。

山口氏は今月8日、フェイスブックで本誌に取材を受けた感想を縷々綴っていたが、他ならぬ安倍首相の昭恵夫人が「いいね！」を押している。ジャーナリストと言うよりはむしろ総理のポチと呼んだ方がいいのではと思しきサポートのされ具合である。

加えて、その取材依頼書をメールで送った後のこと。「北村さま、週刊新潮より質問状が来ました。◎◎の件です」（129ページ参照）

というメッセージが、なぜか本誌に届いた。「北村さま」に転送しようとし、誤ってそのままこちらへ返信してしまったのだ。◎◎には被害女性の苗字が記されている。その文面から、かねてより山口・北村間で今回の事案が問題視され、話し合われてきたことがわかる。

北村と聞いて頭に過るのは、北村滋・内閣情報官(60)を措いて他にない。

国内外のインテリジェンスを扱う内閣情報調査室のトップを5年余務め、今夏には官房副長官への就任が確定的な北村氏は、今年だけで「首相動静」に54度も登場する。水面下における

事件の経緯　※文中、一部敬称略

2013年秋頃	被害女性が山口とNYで知り合う。後日、TBSのNY支局長、山口、彼女の3人でランチ
2015年3月25日	被害女性が山口に仕事を探している旨のメールを送付
3月26日	山口が寄稿した『週刊文春』が発売
4月 3日	一時帰国中の山口と恵比寿で初めて2人きりの食事。2軒目で記憶を失った彼女は港区内のホテルに連れ込まれる
4月 9日	被害女性が原宿署へ被害の相談に向かう
4月15日	高輪署の警部補とホテルの監視カメラ映像を確認
4月18日	山口が彼女にメールで「泥酔していたから介抱しようとした。合意の上」と主張
4月23日	ワシントン支局長を解任
4月30日	被害女性が高輪署に被害届を提出
6月 8日	成田空港で逮捕直前、逮捕状執行が取り消しに
2016年5月30日	山口がTBSを退社
6月 9日	『総理』(幻冬舎)発売
2017年1月27日	『暗闘』(幻冬舎)発売

接触も推して知るべしで、いわば総理の眉間の皺の数まで諳んじる男なのだ。

この点を山口氏に質すと、

〈私がこの件を含む様々な相談を差し上げている民間人でご指摘の人物ではない〉

と否定し、北村氏は、

「何もお答えすることはありません。すいませんが。(いつから相談を?)いえいえ、はい。どうも」

という対応で、ならばと記者たちに振ってみたところ、

「北村滋以外いないでしょ」

と誰もが口にする。単なる偶然だろうか、官邸重用の警視庁刑事部長、アッキー、北村氏……と総理周辺の名ばかりが挙がるのは。

杜撰だったというか…

売れっ子だった山口氏の立場から見て、記事を「好事魔多し」などと評するムキもあるようだが、異議申し立てをしておかねばなるまい。当時の中村格(いたる)・警視庁刑事部長が管轄署である高輪署の捜査を邪魔せず逮捕状を握り潰さなければ、山口氏を一躍スターダムに押し上げた『総理』出版(16年6月)も、その後のコメンテーター活動もありはしなかったのだから。

ところで、その中村氏ご当人について、さる警察庁関係者によると、

「あれほど自分のことが大きく報道されると思っておらず、結構落ち込んでいたそうです。〝有名になると、いろいろ狙われる〟とも愚痴っているとか」

といった反応が聞こえてきたし、彼よりも先輩のキャリア連中のなかには、

「〝捜査にかかわることはコメントできないと言うべきだったが、マスコミ対応に慣れていると自負している分、自分が決裁したと言って墓穴を掘ったね〟などと冷徹な評価を下す人もいます」(同)

中村氏が「(逮捕は必要ないと)私が判断した」と本誌の取材に答えたものだから、新聞・テレビの記者はその真偽のほどを本誌発売後、探りに行っている。そのあらましについて、事情を知る記者に語ってもらうと、

「〝記事の件は、あまりまともだと思わない方がいい。なんで2年前の話が今ごろ出てくるのか、不自然でしょ。女も就職の世話をしてほしいという思惑があったから飲みに行ったのであって所詮男女の揉め事。彼女は2軒目にも同行しているんだしさ。その就職の話が結局うまくいかなかったこととか、最近、山口さんがテレビによく出ているからという、そういうことも(告白の)背景にあるんじゃないの〟と、中村さんはこんな感じの話しぶりだったそうです」

〝物言い〟は身内にも及び、

「〝高輪署の捜査のまま行ったら誤認逮捕だったかもしれない。自分は逃げも隠れもしないし、判断は的確〟とも強調していましたよ」(同)

煎じ詰めると、はしご酒をしたらレイプされても仕方ないとも取れる発言で、法律の問題が男女といういわば文学にすり替わっている。

被害女性はこう話す。

「不起訴という結論が出るまで1年半かかりました。その後、検察審査会の準備を進める中で、週刊新潮さんから取材を受け、こうしてお話しさせていただくことになったのです」

次に、将来の警察庁長官の呼び声高い中村氏を直撃すると、

「(私が彼女に非があると言ったというのは)ありえません、そんなこと! 署の捜査が杜撰だったというか……まあ、あの〝個別具体〟の事件なんで。明日、ちゃんとお答えしますから」

などとし、後に広報を通じ、被害女性を誹謗中傷したり署の捜査を非難したことは断じてないと回答した。

積み上げてきた高輪署の捜査をちゃぶ台返しした時点で〝ザル〟扱いをしたに等しいわけだが、実際どうだったのか。まず、2人をホテルまで連れて行くことになったタクシー運転手が、

「(女性から)〝近くの駅で降ろしてくれ〟って言われたんです。で、降りるのはどの辺にしますかと聞いたら、男の人が〝とりあえず駅はあれだからホテル行って。都ホテル〟と。(ホテルに着いても)なかなか降りず、結局は抱きかかえて降ろされていた。(後部座席が)汚れているんじゃないかと見たら、後ろのマットに吐瀉物が。消化されない状態でドバッと、お鮨の臭いがして。そんなに未消化で残るのって珍しいなと思ったものです」

と語る中身には真率な響きがあるし、その後の動きについては監視カメラの映像が捕捉している。これを

見た、彼女との交際が7～8年になるという知人は、

「山口がタクシーから降りて、ちょっと時間が経ち、中から彼女を引きずり出すシーンと2人がロビーを通過していく場面です。山口が抱きかかえる感じで、彼女の身体が曲がっているというか、力が全く入っていないのを引きずって行くように。私はそんな彼女を一度も見たことがありません」

と明言し、こう継ぐ。

「彼女自身は酔ってもそういう風にならないし、かなりの量を飲んでも大丈夫。ほとんど面識のない人（山口氏とは3度目）と仕事の場でのお酒であれほどになってしまうというのは薬以外にないと思う。彼女は〝近くの駅で降ろして〟と話しているから運転手にとって『意識がない人』という認識はない。けれど彼女にはその部分の記憶がまるでない。もう想像しただけでぞっとします」

その一方で、事件後に山口氏が被害女性に宛てたメールから概略を引用すると、

〈私は私のスーツケースの中やパソコンに吐きかけられたゲロを袋に片付けて濡れタオルで拭いて、トイレにあなたを見に行くと、あなたは自分がトイレの床に吐いたゲロの上で寝込んでいた。私はあなたをゲロから剝がして、あなたを部屋に移してベッドに寝かした。トイレに戻って吐き散らかされたゲロをシャワーで洗い流して、部屋に戻るとあなたはすでにいびきをかいて寝ていた。私はあなたの髪の毛などについた嘔吐臭が耐えられなかったので別のベッドで寝ました〉

その後、

〈あなたは私の寝ていたベッドに入ってきた。その時はあなたは「飲み過ぎちゃった」などと普通に話をした。だから、意識不明のあなたに私が勝手に行為に及んだというのは全く事実と違います。あなたのような素敵な女性が半裸でベッドに入ってきて、そういうことになってしまった〉

しかしホテルの関係者は、

「客室に2つあったベッドのうち1つしか使われた形跡がなかった。しかも、そのベッドには血痕がついていた」

と証言しているというのだ。果たして、ベッドは2つとも使われたのだろうか。

山口氏にはこの点や避妊具なしの性交について質しているが、それには答えようとせず、

「法に触れる事は一切していない。法に触れる事をしていないので起訴を恐れる必要も意図も全くなく、その通り不起訴という結論が出ている」

という弁明を続けているが、本当に起訴を恐れることはなかったのか。

同意の上だと言うのなら

というのも、彼の代理人弁護士が示談を求める姿勢を見せていたことがわかっているからだ。そこから窺えるのは山口氏側が起訴を避けたかったという点だ。親告罪である準強姦罪は被害届を取り下げさえすれば訴訟条件を欠くので起訴できなくなる。その撤回のため、カネをチラつかせた時期があったということになる。このあたりの〝心模様〟について、強姦事件に詳しい三平聡史弁護士に解説してもらうと、

「裁判になって日々多大な時間と労力をかけ、それでも勝てなかった場合は準強姦で有罪判決になり、前科がつきます。勝って無罪になっても、家庭や職を失うこともありますし、成功報酬とそれまでの裁判費用で結構な額がかかります。男性は、強姦だと言われて思い当たる節が少しでもあるのであれば、できるだけ早く・安く問題を解決するために示談の交渉をしたいと思うのが普通でしょう」

そして、こう付け足す。

「準強姦で訴える場合、女性側は心神喪失で抵抗できない状態にあるという前提なので、〝拒否したのに無理やりされた〟などとはっきり証言はできない。裏返すと、男性側の反論の余地が大きくなるわけです。時間もお金も労力もかけるメリットが女性側には皆無なので、準強姦の訴えがデタラメだというのはほとんどないと思います」

最後に、被害女性の知人の言葉を再び引こう。

「彼女は事件翌日の昼間に予定は何もなかった。なのに、早朝に独りでまるで逃げるようにしてホテルを出て行く映像が確認できます。山口が同意の上だと言うのなら、彼女はなんでそう振る舞わなきゃならなかったんでしょうか」

山口氏が自身の身勝手な衝動に抗することができず、悪夢を演出してしまったからということになる。

上は山口氏の相談相手？北村情報官。
下は独断専行した中村警視庁刑事部長（当時）

特集

『安倍総理お友達』の準強姦は不問！

密室『検察審査会』は市民の良識だったか

「勝利宣言」をした山口氏と準強姦逮捕状を握り潰した中村元刑事部長

『総理』なる提灯本をものした「総理のお友達」こと山口敬之元TBSワシントン支局長(51)。彼に準強姦されたと、詩織さん(28)は検察審査会に申し立てをしていたが、「不起訴相当」の結論が下された。密室に閉じ込められた市民の判断は良識に基づいていたか。

「政治を軽蔑する人間は、軽蔑すべき政治しか持たない」とトーマス・マンは言っている。政治の部分を良識に置き換え、衆院のカーボンコピーに堕した良識の府を思ってみたところで、それは健全な考え方を見失った市民自身の肖像ということになる。

市民とは、他の誰かではなく我々のことだ。なぜなら「検察審査会の概要」に、〈20歳以上で選挙権を有する国民の中からくじで選ばれた11人の検察審査員が、検察官が被疑者を裁判にかけなかったことのよしあしを審査している。昭和23年の法施行から、59万人以上の方が検察審査員又は補充員に選ばれている〉と大要あるからだ。

山口元支局長と酒を飲んだ後に意識不明となり、ホテルに連れ込まれてレイプされたと訴えた詩織さん。彼が準強姦容疑で逮捕寸前だったのに、官邸に近い当時の中村格(いたる)警視庁刑事部長がそれを握り潰した事実は本誌が報じた通りである。

彼女が嫌疑不十分での不起訴処分を諒とせず、検察審査会に審査を申し立てたのは5月29日のこと。当の東京第六検察審査会は9月21日、不起訴相当の判断を下した。集められた市民に良識はあったのか。健全な考え方はどこかで失われたのか。司法記者によると、「審査員11人は捜査記録を調べたり、検察官から意見を聴き取ったり、申立人や証人の尋問を行ないます」

判断は起訴相当、不起訴不当、不起訴相当の3つで、「起訴相当は起訴すべしという議決で8人以上の賛成が必要。不起訴不当は処分を是としないから捜査を尽くすべし、不起訴相当は不起訴が妥当というもので、いずれも6人以上が賛成しなければなりません」(同)

ここで、判断に至る奇怪なやりとりを披露しておこ

事件の経緯　※文中、一部敬称略

2013年秋頃	「詩織さん」が山口とNYで知り合う。後日、TBSのNY支局長、山口、彼女の3人でランチ
2015年3月25日	「詩織さん」が山口に仕事を探している旨のメールを送付
3月26日	山口が寄稿した『週刊文春』が発売
4月 3日	ワシントンから一時帰国中の山口と恵比寿で初めて2人きりの食事。2軒目で記憶を失った「詩織さん」はシェラトン都ホテル東京に連れ込まれる
4月 9日	「詩織さん」が原宿署へ被害の相談に向かう
4月15日	高輪署の警部補とホテルの防犯カメラ映像を確認
4月23日	山口がワシントン支局長を解任
4月30日	高輪署が告訴状を受理
6月 8日	成田空港で逮捕直前、逮捕状執行が取り消しに
8月26日	書類送検
2016年5月30日	山口がTBSを退社
6月 9日	『総理』(幻冬舎)発売
7月22日	不起訴処分
2017年1月27日	『暗闘』(幻冬舎)発売

う。詩織さんの代理人弁護士によると、

「7月18日頃、第六審査会の伊藤事務局長から、追加の証拠の提出時期を確認されました。詩織さんの陳述書がまだでしたので、〝その週のうちに〟と回答したのですが」

それがままならなくなった同月21日夕方のこと。

「伊藤事務局長から〝証拠を追加のうえでの議決を希望されますよね？〟と聞かれ、当方が〝当然希望します〟と述べたところ、〝こちらにも都合がありまして〟と言われたのです」

あたかも、証拠がぜんぶ揃っていないのに判決を下していいですかと裁判官が聞くような行状ではないか。

この点、元最高検検事で筑波大名誉教授の土本武司氏の言葉を借りれば、

「被害者側に事件の早期解決を図るような行為は無用なことです」

また、審査に関しては審査員が望むなら補助役の弁護士を付けることもできるが、

「補助員は付いていないということでした。どういう場合に付くのか質すと、〝難しいケース〟と答えましたね」（前出の代理人）

土本氏と同じく検事出身で弁護士の郷原信郎氏は秘密のベールに分け入って、

「〝難しいケース〟とは（2011年に強制起訴された）小沢一郎氏の『陸山会事件』のように政治資金規正法の解釈が問題になるような場合を言うのでしょう。審査会事務局が提案しない限り、検察官とは異なった立場の法律の専門家の意見を聞くということにはならないのだろうと思います。補助弁護人が選任されていないということは、〝法的に起訴すべきだった〟という方向において、専門家の意見は反映されていないことを意味しています」

別のヤメ検弁護士も、

「不起訴理由を正しく理解してもらいたくて審査会に押しかけたことがある。審査会側が認めれば問題ない」

と打ち明けるのだった。

この国のマスコミは…

郷原弁護士は、

「私は起訴相当の結果になる可能性が高いと考えていました。新潮の記事を前提にすれば、原因が飲酒酩酊なのか薬物なのかは不明ですが、抗拒が困難な状態での姦淫の事実があったことが疑われる。一般市民の審査員の意見が、〝裁判所の判断で決めるべき〟という方向に傾く可能性が強いと見ていました」

と述べ、こう続ける。

「審査の経過は分かりませんが、検察官が審査会に呼ばれて、なぜ起訴できないのか、の理由をしっかり説明した可能性が高いと思います。私も現職時、参加したことがあります。今回、1年に亘る検察の捜査の中で消極証拠を綺麗に揃えた検察官が要領よく素人相手に説明すれば、反対の立場の法律専門家の意見がないだけに、審査会の構成員は検察官の意見にはかなり影響される可能性がある」

直木賞作家の中島京子さんは、本件についてメディアの良識に異議を申し立てた。それは〈（朝日新聞は）もっときちんと取り上げる方法があったのでは〉と、『わたしの紙面批評』（同紙8月19日付）に記したものだ。

「一度不起訴になっているということで、新聞が取り上げるのは難しいのかもしれません。が、その不起訴自体に疑念があるのですから取り上げないのはとても不思議でした。あるいは、マスコミ全体がセクハラを許容する体質になっているのかもしれません。詩織さんのケースのように仕事であっても〝男女2人で食事に行ったらセクシャルな雰囲気になるのは仕方がない〟と言われてしまう。テレビは叩きやすい相手だけを叩く憂さ晴らしの役割しか果たさないし、新聞では犯罪報道がタブーだなんて、この国のマスコミは変ですよ」

とは、中島さんご本人。社会の木鐸をもって鳴る新聞もその良識を見失っていた、一つの証明だろう。

さて、この後の「詩織さんインタビュー」にもある通り、舞台は民事へ移るが、

「新潮の記事の通りであれば、〝被害者の性的な自由を侵害する行為〟として、不法行為による損害賠償請求を起こすことは可能だと思います。それなりの立場の人から就職の世話をすると言われ、それを断ったら……と不安に感じる弱みにつけこんで食事に誘う、酒を飲ませてホテルに連れ込む。それは、準強姦という

「なぜ犯罪にならないのか。民事で問う」

被害申し立て「詩織さん」インタビュー

犯罪に当たらないとしても、それ自体が被害者に対する不法行為と判断される余地があります」（郷原氏）

あるいは、

「検察が集めた証拠はあくまで刑事事件のためのもので、しかも不起訴ですから記録の閲覧謄写はできません。詩織さんから民事訴訟を起こされれば山口氏自身が、被告として反論・反証しなくてはならない。外形的な事実だけ見れば、抗拒不能の女性に性行為を行なった疑いが強いので、不法行為にあたる可能性が高い。山口氏の側で、それが合意の上であったことを、検察の証拠ではなく山口氏が持っている証拠で立証しなければならない」（同）

当の検審は、審査員の男女比、賛否理由、検察官が審査会へ出席したのか否か、いずれも不開示とした。密室に秘匿された良識を公開の民事裁判で見つけられるか、市民である我々が問われているということになる。

出来事の成り行きを見守ってくれている友人や検察審査会に陳述書を出してくれた人と話していて、最悪でも「不起訴不当」だと思っていました。審査結果が出るまでもう少し時間がかかるものだとも伺っていたので、その点でも驚きました。

最初に週刊新潮の取材に応じ、その後、顔と名前を出して記者会見をしましたが、後悔はありません。同じような当事者の方から連絡を頂き、その中に、「自分に起こったことを初めて他人に話すことができました。詩織さんと出会ってよかった」というものもあり、私も表に出て行って本当によかったと思っています。

今回、検審からは発言の機会を与えられることは叶いませんでした。審査員の方などが望めば出席することも不可能ではないと聞きましたが……。陳述書では言いたいことをしっかりと述べました。けれど、書面だけでは分からないこともありますし。もし当事者に聞く必要がないということなら、その理由を知りたいとは思います。

加えて、一度、警察が逮捕すると決めて裁判所が逮捕状を出した。そのベースがある一方で、検察審査会の判断が起訴相当、あるいは不起訴不当でなかったことについて、それぞれを見極める必要があるでしょう。逮捕イコール起訴ではなく、検察審査会と裁判所の判断が異なるのは理解できますが、それ以外に分からないことが多すぎるのです。

山口氏は今回の判断を受けて、「一連の経過において犯罪行為があったと認定されたことは一度もなく、今回不起訴処分が確定したことで、この案件は完全に終結しました」とコメントを出しました。彼の意見はそれで正しいと思います。私が疑問だと指摘しているのは、なぜこれが犯罪行為にならないのかということ。

司法の手続きやシステム、それらをクリアにしようとすればそれだけ分からない点も出てくる。それにしても、これが犯罪にならないのだとすれば、ものすごく恐ろしいことだと思います。

当時の中村刑事部長が直前になって逮捕中止を命じたことにも疑問は氷解しないままです。なぜそういう判断に至ったのか説明になっていません。

逮捕状請求までに1カ月強の捜査がなされて、必要な証言、証拠はすべて整っていたという判断だったのに、やっぱり不十分だったと。警視庁高輪署から捜査一課に捜査が移ってからもそれ以上のものは出て来ていない。一体何を捜していたのでしょうか？

更に去年7月、不起訴になった際に「嫌疑不十分」、つまり疑わしさは残るが証拠は不十分という結果でした。その、〝証拠が不十分である〟というラインがはっきりしないですよね。この犯罪は許されるものなのでしょうか。「今後こういうことがあっても問題ない」と言われている気がしてならないのです。

ホテルという密室で第三者の証言がほとんど望めない中、少なくない証言、事件現場であるホテルのセキュリティカメラ静止画像、下着に付着したDNAの鑑定結果など、証拠を揃えられたと考えるからです。

現在、民事裁判の準備を進めているのは事実です。セキュリティカメラ動画についてホテル側からお渡し頂けていませんが、民事の手続きをすることで、それを提出すると約束して頂きました。そういった新しい証拠が手に入るので、刑事ではできなかった真実の解明が少し進むかもしれないと考えています。できることは全てやってみる決意です。

検察審査会が動き出す「安倍総理」ベッタリ記者の「準強姦」特集

顔を出しての会見は異例中の異例

安倍総理ベッタリ記者こと山口敬之・元TBSワシントン支局長（51）。彼が準強姦容疑で逮捕寸前だったこと、官邸に近い警視庁刑事部長がそれを握り潰した事実を本誌が報じて3週間。ついに女性が検察審査会に審査申立てし、レイプの事実を顔出し会見で告発した。

歳月は人を待つことはないけれど、記憶の方は時に先回りして人を出し抜き、傷つけたりするものだ。

彼女にとって、拭いがたい悪夢から短くて長い2年余の月日が流れていた。

嫌疑不十分での不起訴処分を諒とせず、検察審査会に審査を申立てた彼女が会見に臨んだのは5月29日午後5時のこと。東京地裁2階の約20平方㍍の会場には、50名ほどが集まり立錐の余地なく人いきれがしている。

「私は2年前、レイプの被害に遭いました」

そう語り始めた彼女、「詩織」さん（28）が経験した事件とはどんなものだったのか。つまり、本誌が〈「警視庁刑事部長」が握り潰した「安倍総理」ベッタリ記者の「準強姦逮捕状」〉などと報じてきた中身を改めて振り返っておこう。

ベッタリ記者とは2013年から15年までTBSのワシントン支局長を務めていた山口敬之氏を指す。野党の体たらくと背中合わせである安倍一強時代の申し子としてジャーナリストに転身した彼は、4月だけで4局8番組、延べ47回ものテレビ出演をこなした。安倍首相と自身の会話を打ち明けるその芸風は、ジャーナリストと呼ぶよりはむしろ電波芸者そのものだった。

そんな男と詩織さんが知り合ったのは13年秋頃。ジャーナリズムと写真を専攻し、英語・スペイン語に堪能な彼女を評価した山口氏は、同じTBSのNY支局長に引き合わせるなど犬馬の労を厭（いとわ）なかったし「ワシント

事件の経緯　※文中、一部敬称略

2013年秋頃	詩織さんが山口とNYで知り合う。後日、TBSのNY支局長、山口、彼女の3人でランチ
2015年3月25日	詩織さんが山口に仕事を探している旨のメールを送付
3月26日	山口が寄稿した『週刊文春』が発売
4月 3日	ワシントンから一時帰国中の山口と恵比寿で初めて2人きりの食事。2軒目で記憶を失った彼女はシェラトン都ホテル東京に連れ込まれる
4月 9日	詩織さんが原宿署へ被害の相談に向かう
4月15日	高輪署の警部補とホテルの防犯カメラ映像を確認
4月23日	山口がワシントン支局長を解任
4月30日	高輪署が告訴状を受理
6月 8日	成田空港で逮捕直前、逮捕状執行が取り消しに
8月26日	書類送検
2016年5月30日	山口がTBSを退社
6月 9日	『総理』(幻冬舎)発売
7月22日	不起訴処分
2017年1月27日	『暗闇』(幻冬舎)発売

ンに来てくれたらインターンでも何でも採りたいな」と賛辞も惜しまなかった。

1年半が経過し、就職活動をする彼女にその記憶が甦って彼にメールをしたところ、〈しばらくこっちで仕事をしてもらいながら正式な採用に向かうという手も。それなら私が決裁できます〉といった返事が来た。更に、雇用を前提にビザの取得について話し合いをしたいとして、〈来週後半、空いてる夜ある？〉と彼は約束を取り付けた。それが15年4月3日、彼女は既に悲劇の関頭に立たされていたのだった。

東京・恵比寿の老舗串焼き屋で待ち合わせしてつまんだ後、鮨屋にハシゴ。酒量はビールをグラスで2杯、ワイン1杯と日本酒2合をシェアした程度で、詩織さんは酒に滅法強いにもかかわらず、店で意識を失う。

午後11時頃に退店してからの動きについては、両名を乗せたタクシー運転手がはっきりと覚えていて、

「(女性から)〝近くの駅で降ろしてくれ〟って言われたんです。でも男の人が〝とりあえず駅はあれだからホテル行って。都ホテル〟と。(ホテルに着いても)なかなか降りず、結局は抱きかかえて降ろされていた。(後部座席が)汚れているんじゃないかと見たら、後ろのマットに吐瀉物が。消化されない状態でドバッと、お鮨の臭いがして。そんなに未消化で残るのって珍しいなと思ったものです」

そこからは防犯カメラの映像を見た、彼女との付き合いが7～8年になるという知人が告白してくれる。

「山口がタクシーから降りてちょっと時間が経ち、中から彼女を引きずり出すシーンと2人がロビーを通過する場面を見ました。彼女の身体がくの字に曲がっているというか、力が全く入っていないのを引きずって行くように。そんな彼女を一度も見たことがありません」

「捜査の指揮として当然」

そうやって山口氏が投宿する港区の「シェラトン都ホテル東京」に無理やり連れ込まれた詩織さんは、下腹部の痛みで未明に意識が戻る。全裸の身の上で彼が腰を動かしており、やっとの思いで撥ね退けたら避妊具無しの陰茎が見えた。トイレに逃がれようとしたが、再びベッドに顔と身体を押さえつけられる。何とか2度目のレイプを回避した彼女は、英語で抗議したのだ。

詩織　一緒に仕事をしようという話だったのに、どういう神経でこんなことをするのか。しかもコンドームも付けないで、妊娠だって病気だってあるだろうし。

山口　ごめん。君のことが本当に好きになってしまって。早くワシントンに連れていきたい……。これから7時にチェックアウトをして空港に向かうので、シャワーを浴びたら一緒に薬局でピルを買いましょう。

詩織　とにかく服を返してください。(なかなか返却されず部屋を探し回る)

山口　下着だけでもお土産で持って帰ってもいいかな。いつもは強気なのに困った時は子供みたいで可愛いね。

――男女の関係にあったわけではない相手を毒牙にかけた後も、山口氏はその不誠実な対応で詩織さんを傷つけ続けた。例えば、〈妊娠の可能性がないと以前断言していましたが〉という彼女のメールに返信して、〈私はそういう病気なんです〉〈精子の活動が著しく低調だという病気です〉と避妊具をつけなかった行動を正当化したり、以下の概略の通り「ゲロ」という言葉を頻繁に用い、その尊厳を踏みにじるかのようだ。

〈あなたは部屋の二カ所に嘔吐した後、トイレに駆け込みました。スーツケースの中やパソコンに吐きかけられたゲロを袋に片付けて濡れタオルで拭いて、トイレを見に行くと、あなたは床に吐いたゲロの上で寝込んでいました。ゲロから剝がしてゲロまみれのあなたのブラウスとスラックスを脱がせ、ベッドに寝かしました。嘔吐臭が耐えられなかったので別のベッドで寝ました。その後あなたは私の寝ていたベッドに入ってきて「飲み過ぎちゃった」などと普通に話をしていました。意識不明のあなたに勝手に行為に及んだというのは全く事実と違います。私もそこそこ酔っていたところへ素敵な女性が半裸でベッドに入ってきて、そういうことになってしまった〉

ところが、ホテルの関係

者は、

「客室に2つあったベッドのうち1つしか使われた形跡がなく、しかもそこには血痕がついていた」

と明かすのだ。

ともあれ、そのようなやり取りを続けながら、詩織さんは警察に告訴状を提出する機会を窺っていた。それが高輪署に受理されたのが4月30日で、そこから先に触れた運転手やホテルのベルボーイの証言、防犯カメラの映像などの証拠が揃い、6月4日までには準強姦容疑で逮捕状が発付。8日、山口氏が米国から成田空港へ到着するタイミングで逮捕する算段だったが、その寸前で中止されたのだった。空港へ詰めていた捜査員から彼女に電話が入る。

「今、目の前を山口が通過していきましたが、上からの指示があり、逮捕をすることはできませんでした。私も捜査を離れます」

「上」とは他ならぬ中村格・警視庁刑事部長（当時）である。社会部デスクが、

「昭和61年警察庁入庁組の出世頭です。菅さん（義偉・官房長官）の秘書官として得意の危機管理能力を発揮し、絶大な信頼を得ました。官邸を離れた今も1日最低1度は菅さんと連絡を取り合う間柄なのです」

と評し、官邸の守護神として君臨する中村氏ご当人に、本誌は捜査中止の理由を質している。

――安倍首相や菅長官の意を受けてのことか。

「ありえないですよ」

――現場の複数の捜査員が極めて異例のことと認識している。逮捕状が出ていた。

「具体的には申し上げませんけど、あの、これは相当、誤った情報です。はい」

――逆になぜ現場の捜査員たちがそう思ったのか？

「……それは捜査自体のそれぞれの判断が、それぞれの立場であったはずですよ」

――中村さんが忖度をしたということはないですか？

「ありえません。私は山口さんなんて普通、知りもしないし」

――ではなぜ、捜査の中止を命じられたんですか？

「捜査の指揮として当然だと思います」

――合理的な理由があったということですね？

「それは事件の中身をご覧になられたらわかります」

――随分記憶には残っておられるということですね？

11人中8人以上の賛成

そういった判断の是非を問う検察審査会について司法記者に解説願おう。

「選挙権のある市民の中からくじで選ばれた11人が審査員となり、捜査記録を調べたり、検察官から意見を聴き取ったり、申立人や証人の尋問などを行ないます」

判断は起訴相当、不起訴不当、不起訴相当の3つ。

「起訴相当は起訴すべしという議決で、審査員のうち8人以上の賛成が必要です。不起訴不当は処分は諒とできないから捜査を尽くすべき、そして不起訴相当は不起訴が妥当というもので、どちらも6人以上が賛成しなければなりません」（同）

起訴相当と議決したら検察官は再捜査する。それでも判断が覆らなければ審査会で再検討し、再び8人以上が「起訴すべし」とすれば、容疑者は強制起訴されることになる。10年に政治資金規正法違反容疑で小沢一郎・元民主党代表が、同じ年にJR宝塚線の脱線事故に関する業務上過失致死傷容疑でJR西日本の歴代3社長が、それぞれ強制起訴されている。一方、不起訴不当の最たる例が、本誌が報じた渡辺喜美・みんなの党代表（当時）に関する政治資金規正法違反容疑だ。

「クロに近いと言いますか、嫌疑が拭えないという判断を我々は持ちますね」（同）

性犯罪事案に詳しい三平聡史弁護士に聞くと、

「被害者が受けた被害に関して検察審査員に同情の感情を喚起しやすく、起訴議決が出る可能性も少なくないと言えるでしょう」

最後に山口氏に質すと、

「不起訴処分は既に1年前に全ての関係者に伝えられています。純粋に検察の判断に不満があるなら、時をおかず不服申立を行われるのが自然だと考えます。なぜ御誌の報道が先にあったのかを含め、今後の対応を検討する為に全体状況を理解しようと努力しています」

そう疑義を呈するのだが、詩織さんはこう答える。

「不起訴処分後は暫く塞ぎこんでいました。そこから気持ちを前向きにし、検察審査会に向けて調査を続け、証拠開示にも時間を要したのです。『週刊新潮』の報道でもその旨を明らかにしていますし、起訴されるものと確信しています」

官邸を巡る、もう1つの「あったものをなかったものにした」出来事が動き出したということになる。

中村格氏に聞きたいこと

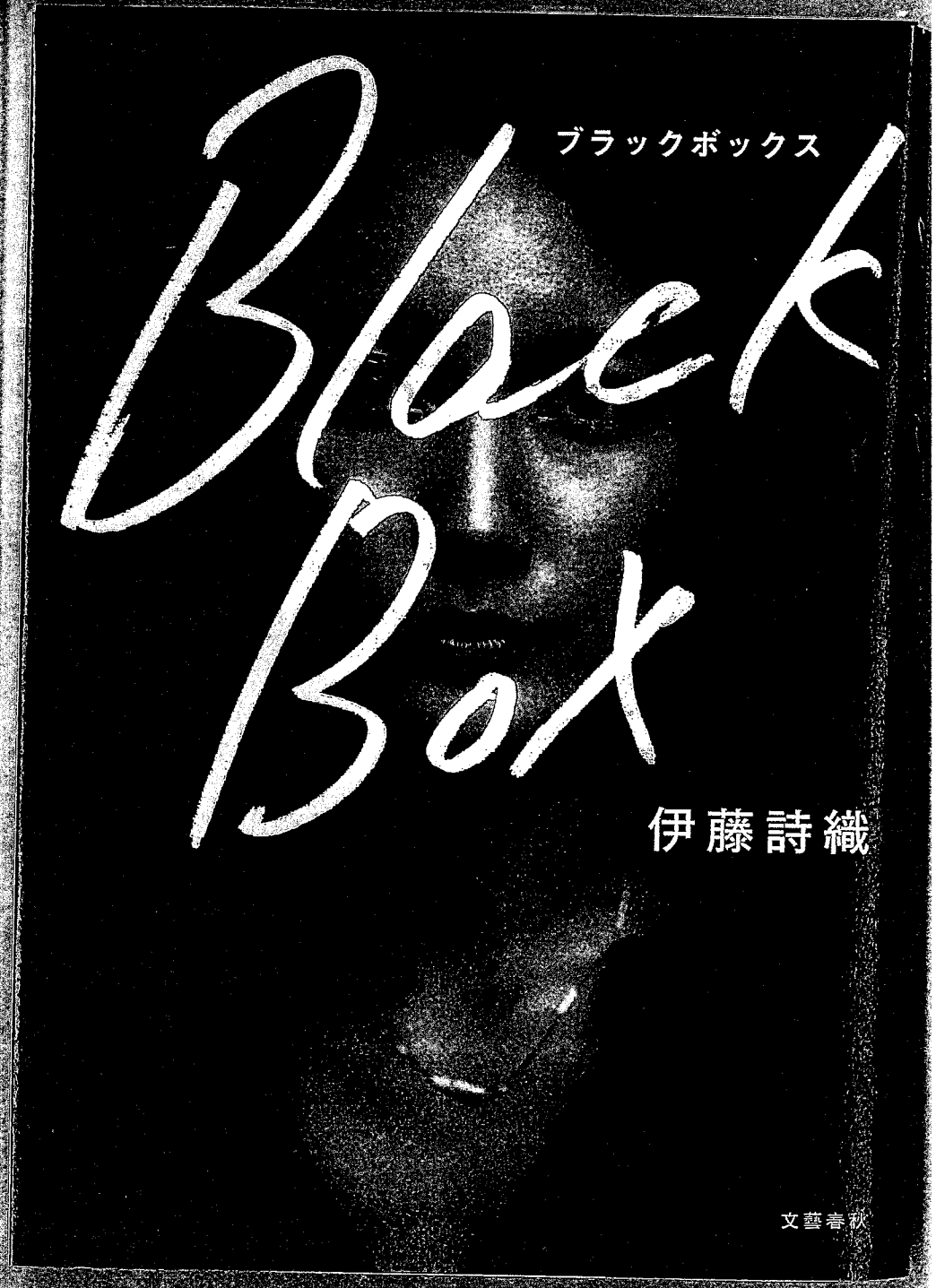
今でも、どうしても知りたいことが二つある。

一つは、「なぜ逮捕を取り止めたのか」。中村格氏に、その判断の根拠をぜひ聞きたかった。この質問は警視庁捜査一課にも何度もした。言い訳ではなく、真実を聞けない限りは納得ができないことだった。

私は今回、この本を出すにあたり、中村氏への取材を二回、試みたが失敗に終わった。出勤途中の中村氏に対し、「お話をさせて下さい」と声をかけようとしたところ、彼は凄い勢いで逃げた。人生で警察を追いかけることがあるとは思わなかった。

私はただ、答えが欲しいのだ。中村氏にはぜひ、「私のした判断は間違いではなかった。なぜなら……」ときちんと説明して頂きたい。なぜ元警視庁刑事部長の立場で、当時の自分の判断について説明ができず、質問から逃げるばかりなのだろうか？

検察審査会申し立てについて会見した後、あるジャーナリストから学んだことがあった。現在住んでいる場所や実家、友人のプライバシーまでをもメディアに詮索されたらどうしよう、と悩んでいた時、彼は、「できる限り週刊誌の取材には答えること」とアドバイスしてくれたのだ。逃げるから秘密があると思われ、さらに追いかけられるのだ、と。そのアドバイスに従ってメディアに対応したところ、実際に懸念していたようなことは一切起きなかった。



現在、中村氏に対しては文書を送り、回答待ちの状態だ。この本にその結果を書くことができないのは残念だが、中村氏には正面から答えて頂きたい。

もう一つは、高輪署から警視庁捜査一課にこの事件が移されてから作られたという、捜査報告書のことだ。高輪署が作ったタクシー運転手の調書にはあった、私が何度も「駅で降ろして下さい」と言っていたという話が、この報告書からは抜けていた、という情報について。

検察審査会の結果が出た後、何人かのジャーナリストから、次のような「噂」を聞いた。

「防犯ビデオの映像を見たけれど、彼女は普通に歩いていた。タクシー運転手の証言には、彼女が自分で吐いたものを自分で片付けていた、とあった。だから、彼女には最後まで意識があったんじゃないか」。そういう声があって不起訴相当の議決が出たのだ、と話している新聞記者がいる、と。

語られている内容は噂に過ぎないが、そのような噂を流す人物がいることは間違いない。その噂の、そもそもの出所はどこなのか。

こうした話を聞くにつけ、「警視庁の捜査報告書」を疑いたくなってしまうのだ。

最後に整理しておきたい。

あの日の出来事で、山口氏も事実として認め、また捜査や証言で明らかになっている客観的

事実は、次のようなことだ。

・TBSワシントン支局長の山口氏とフリーランスのジャーナリストである私は、私がTBSワシントン支局で働くために必要なビザについて話すために会った。
・そこに恋愛感情はなかった。
・私が「泥酔した」状態だと、山口氏は認識していた。
・山口氏は、自身の滞在しているホテルの部屋に私を連れて行った。
・性行為があった。
・私の下着のDNA検査を行ったところ、そこについたY染色体が山口氏のものと過不足なく一致するという結果が出た。
・ホテルの防犯カメラの映像、タクシー運転手の証言などの証拠を集め、警察は逮捕状を請求し、裁判所はその発行を認めた。
・逮捕の当日、捜査員が現場の空港で山口氏の到着を待ち受けるさなか、中村格警視庁刑事部長の判断によって、逮捕状の執行が突然止められた。

検察と検察審査会は、これらの事実を知った上で、この事件を「不起訴」と判断した。

伊藤詩織（いとう しおり）

1989年生まれ。ジャーナリスト。
フリーランスで、エコノミスト、アルジャジーラ、ロイターなど
主に海外メディアで映像ニュースやドキュメンタリーを発信する。

Black Box　ブラックボックス

2017年10月20日　第1刷発行

著　者　伊藤詩織（いとうしおり）
発行者　鈴木洋嗣
発行所　株式会社　文藝春秋
〒102-8008
東京都千代田区紀尾井町3-23
電話　03-3265-1211

印刷・製本　凸版印刷

万一、落丁・乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。小社製作部宛、お送りください。定価はカバーに表示してあります。本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、私的使用以外のいかなる電子的複製行為も一切認められておりません。

©Shiori Ito 2017
Printed in Japan

ISBN978-4-16-390782-6

あなたは、どう考えるだろうか。